

史跡 齋宮跡

平成26年度発掘調査概報

2016年3月

齋宮歴史博物館



S B10289と工事中の「さいくう平安の杜」復元建物

序

平成27年、史跡齋宮跡に、またひとつ齋宮跡の価値を実感していただける新しい場所が誕生しました。「さいくう平安の杜」は、復元された平安時代の3棟の建物を中心とした史跡公園です。今後、齋宮歴史博物館、いつきのみや歴史体験館と合わせて、齋宮跡を訪れるすべての方に、史跡齋宮跡の歴史と文化を体験していただける場所として、末永く活用していただくことを切に希望します。

さて、今回報告する発掘調査は、史跡の実態を解明するため、御館区画の南西部で行ったものです。平安時代前期にさかのぼると考えられる南北に平行する2棟の掘立柱建物を確認したほか、平安時代後期には、南側の方格地割の道路付近に建物が集中していく状況が確認できるなど、方格地割内部の実態の一端が明らかとなり、史跡齋宮跡の解明がまた一歩前進いたしました。調査で得られた成果は、地元明和町の皆様をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2016(平成28)年3月

齋宮歴史博物館

館長 濱口尚紀

例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成26年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第183・184次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第182次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器の分類と年代観については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館、2001年）、大川勝宏2010「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要十九』斎宮歴史博物館、大川勝宏2005「平安時代後期の斎宮跡」『明和町史 斎宮編』による。
- 5 斎宮跡の時期区分については土器の編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記すべきであるが、本文中ではこれを簡略に「斎宮Ⅱ-1期」等と表現している。
- 6 遺構表示記号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 Pit：柱穴、ピット
- 7 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っているが、一部の遺物は原寸大で掲載している。遺物写真は縮尺不同である。
- 8 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第5版（1989年）を用いて補っている。
- 9 遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。
- 10 本書の執筆は、伊藤文彦があたり、編集は調査研究課で行った。遺物写真の撮影は伊藤文彦が行った。また、発掘調査については新名強・伊藤文彦が担当し、資料整理については、大川勝宏・穂積裕昌・宮原佑治・杉原泰子・八木光代・大橋由紀が補佐した。

目 次

I 前言	1
II 第183・184次調査	7

挿 図 目 次

第Ⅰ-1図 史跡斎宮跡位置図	3
第Ⅰ-2図 平成26年度発掘調査区位置図	4
第Ⅰ-3図 斎宮跡方格地割区画名称図	5
第Ⅰ-4図 史跡斎宮跡における大地区表示図	6
第Ⅱ-1図 第183・184次調査 大地区・グリッド図	7
第Ⅱ-2図 第183・184次調査 遺構平面図	8
第Ⅱ-3図 第183・184次調査 土層断面図	9
第Ⅱ-4図 第183・184次調査 遺物実測図(1)	14
第Ⅱ-5図 第183・184次調査 遺物実測図(2)	15
第Ⅱ-6図 第183・184次調査 t10p2 遺物出土状況	16
第Ⅱ-7図 第183・184次調査 t10p70 遺物出土状況	16

写 真 図 版 目 次

巻頭図版	S B 10289と工事中の「さいくう平安の社」復元建物	
写真図版1	第183次調査全景(南から)／第184次調査東トレンチ全景(北から)／ 第184次調査西トレンチ全景(北から)	20
写真図版2	S B 10299(南から)／S B 10289(西から)	21
写真図版3	S B 10770、S B 10773、S B 10776(西から)／S B 10770、S B 10773、 S B 10776(北から)	22
写真図版4	t10p2 遺物出土状況(北から)／t10p70遺物出土状況(北から)	23
写真図版5	出土遺物	24

表 目 次

第 I - 1 表	平成26年度発掘調査一覧表	2
第 II - 1 表	第183・184次調査掘立柱建物一覧表	11
第 II - 2 表	第183・184次調査遺構一覧表	11
第 II - 3 表	第183・184次調査遺物観察表（1）	17
第 II - 4 表	第183・184次調査遺物観察表（2）	18

I 前 言

1 調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した斎宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査では、史跡西部に所在すると想定される飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することが課題であるほか、史跡東部に存在した方格地割と平安時代の斎宮跡中核部の解明も重要な課題である。

近年、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まったことから、平成18年度に「史跡整備の在り方検討会」を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向が示された。そして、平成22年3月に「史跡斎宮跡東部整備基本計画書」が策定され、平成23年度からは現地での工事に着手して平成27年10月、史跡公園「さいくう平安の杜」が竣工した。

一方、明和町でも「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画では、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画しており、平成27年度から工事に着手している。さらに、平成27年4月24日「折る皇女斎王のみやこ斎宮」が日本遺産に認定された。

発掘調査

史跡東部の方格地割の内部構造の解明は斎宮跡調査の中での重要な課題の一つである。御館区画においては、これまでの調査で、御館区画では斎宮跡Ⅱ期第1段階から斎宮跡Ⅲ期にかけて継続的に建物群が造営されていること、斎宮跡Ⅱ期第3段階以降、特に斎宮跡Ⅲ期以降は建物群が区画南辺道路から

20m付近に集中することが指摘されている。一方区画の南西部や区画の北半など、調査の及んでいない範囲が広く残されており、区画内部の利用状況の実態解明にはまだ至っていない現状がある。

上記の課題を受け、御館地区の実態解明を目的として、第183・184次調査を実施した。調査面積は、第183次調査が242.4㎡、第184次調査が163.3㎡、合計405.7㎡、調査期間は第183次調査が平成26年7月23日～11月14日、第184次調査が平成26年12月2日～平成27年2月16日であった。

整備

史跡東部整備事業は、柳原区画の発掘調査で確認した掘立柱建物3棟の復元や平安時代の方格地割の広がりを示す区画道路の整備など、平安時代の斎宮の姿を再現するもので、平成26年度は、平成25年度に着手した復元建物建設工事を継続した。また、平成27年度の着手を目指して、斎宮歴史博物館と上園芝生広場を結ぶ古代伊勢道（旧称：奈良古道）の整備にかかる実施設計を行った。

発掘調査現場の公開・活用

近年斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上を目標として、発掘調査現場の積極的な活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や夏休み子ども体験発掘教室、学校団体等の体験発掘を開催している。

2 調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

平成26年度

大川勝宏（課長）

穂積裕昌（主幹兼課長代理）

新名 強（主査）

伊藤文彦（技師）

平成27年度

大川勝宏（課長）
 穂積裕昌（主幹兼課長代理）
 伊藤文彦（技師）
 宮原佑治（技師）

〔指導委員〕

浅野 聡（三重大学大学院准教授）
 稲葉信子（筑波大学大学院教授）
 金田章裕（人間文化研究機構機構長）
 佐々木恵介（聖心女子大学教授）
 鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）
 所 京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）
 八賀 晋（三重大学名誉教授）
 増渕 徹（京都橘大学教授）
 松村恵司（奈良文化財研究所長）
 渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）
 綿貫友子（大阪教育大学教授）
 〔研究員〕
 黒田龍二（神戸大学大学院教授）

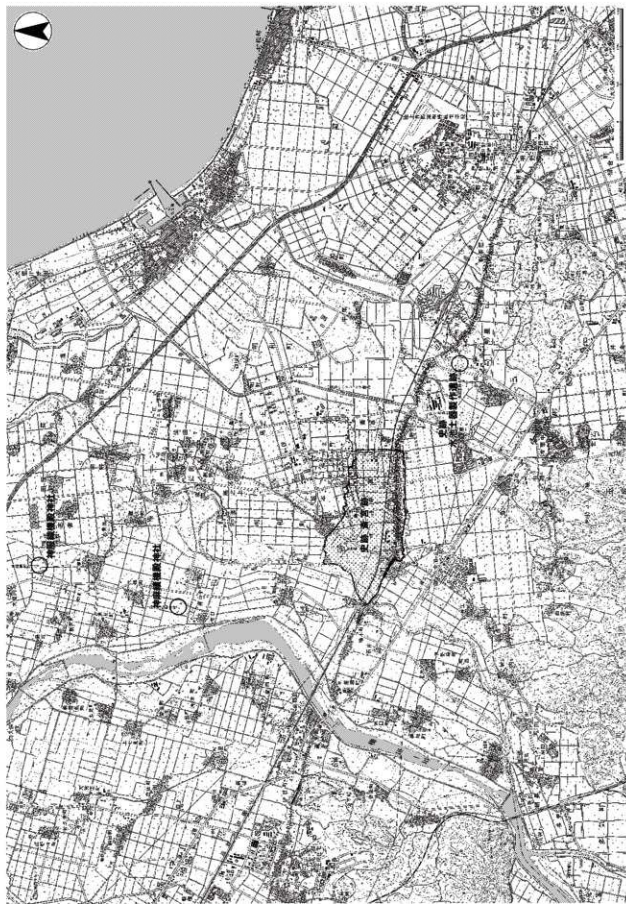
（五十音順・敬称略）

3 斎宮跡調査研究指導委員会

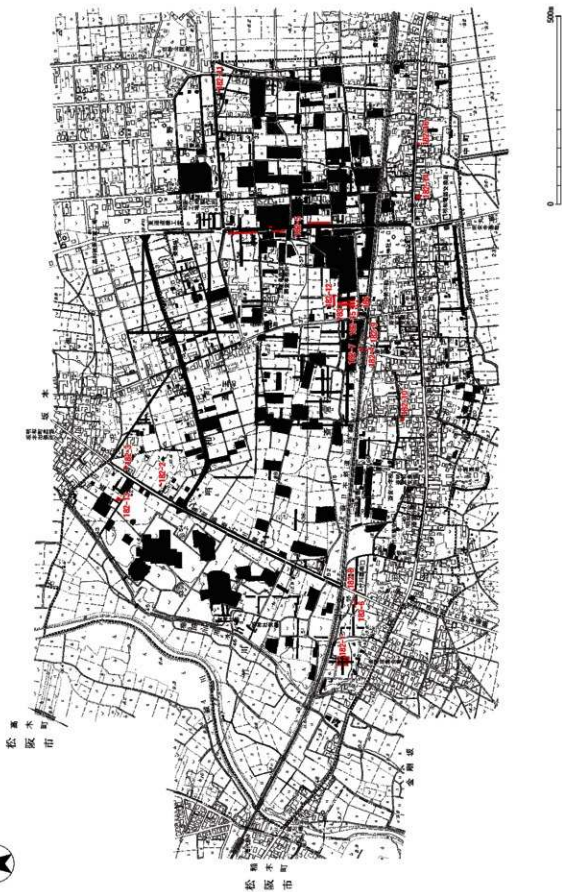
斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成26年9月9日、平成27年3月3日の2回、委員会を開催し、第183・184次調査を含む御館区面の性格や明和町の整備事業について指導や助言を得たほか、復元建物については斎宮跡研究員も同席して指導を受けた。指導委員・研究員の方々は下記のとおりである。

調査次数	地区	面積 (㎡)	調査期間	位置	土地所有者	現状変更	保存地区 区分
183	P11	242.4	H26.7.23~11.14	明和町大字斎宮字御館	明和町	計画発掘調査	1
184	P11	163.3	H26.12.2~H27.2.16	明和町大字斎宮字御館	明和町	計画発掘調査	1
182-1	M12	235.1	H26.4.8~7.24	明和町大字竹川字中垣内	個人	太陽光発電	3
182-2	H10, H11	46.6	H26.4.23~5.8	明和町大字斎宮字古里	個人	住宅新築	3
182-3	M11	37.2	H26.5.30~6.11	明和町大字斎宮字古里	個人	住宅新築	3
182-4	S13	1.8	H26.6.23	明和町大字斎宮字内山	鉄道会社	改札口設置	4
182-5	U8	88.7	H26.7.4	明和町大字斎宮字栗殿、 西加原、柳原地内	明和町	休憩所建設等	1,3
182-6	G11	107.5	H26.7.14~8.6	明和町大字竹川字中垣内	個人	太陽光発電	3
182-7	I9	97.3	H26.10.7~11.28	明和町大字斎宮字内山	明和町	休憩所建設等	3
182-8	L6	32.7	H26.11.28	明和町大字竹川字東裏	明和町	排水管	3
182-9	N13	1.4	H26.12.20	明和町大字斎宮字内山	鉄道会社	信号機建替	4
182-10	J12	5.0	H27.1.6~2.9	明和町大字斎宮字牛葉	個人	住宅新築	4
182-11	R7, S7	12.1	H27.1.6~1.13	明和町大字斎宮字東前沖	個人	駐車場	3
182-12	P11	104.7	H27.1.26~	明和町大字斎宮字御館	土地開発公 社	発掘調査	1
182-13	W13	30.1	H27.1.29~2.3	明和町大字竹川字古里	個人	住宅新築	3
182-14	K4	51.6	H27.2.27~3.14	明和町大字斎宮字中西	個人	住宅新築	4
182-15	K12, K13	13.3	H27.3.10~3.11	明和町大字斎宮字御館	明和町	史跡整備	1
182-16	L11	2.9	H27.3.3	明和町大字斎宮字中西	個人	浄化槽	4

第1-1表 平成26年度 発掘調査一覧表



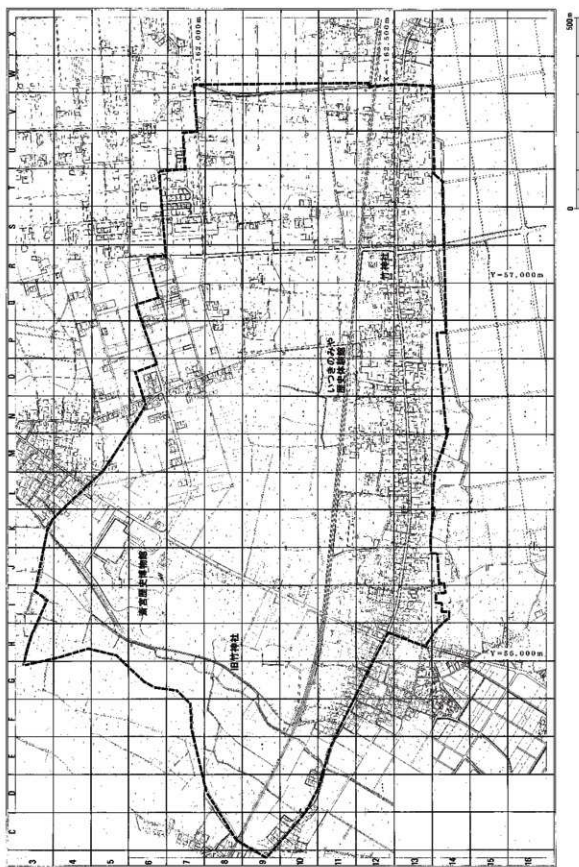
第1-1図 史跡斎宮跡位置図 (1:50,000) 国土地理院発行1/25,000「松阪」「明野」(平成4年)より



第 1 - 2 図 平成26年度発掘調査区位置図 (1:10,000)



第1-3图 斋宫跡方格地割区画面名称图 (1:5,000)



第1-4図 史跡斎宮跡における大地区表示図(2002年)

Ⅱ 第183・184次調査

6 A P 11御館地区

1 はじめに

第183・184次調査区は、平安時代斎宮の方格地割という御館区画の南西部に位置する。御館区画ではこれまでに、第8-9次、19次、55次、94次、121-3次、129次、158次、172次の8回の調査が行われている。これまでの調査で、御館区画では斎宮Ⅱ-1期から斎宮Ⅲ期にかけて継続的に建物群が造営されていること、斎宮Ⅱ-3期以降、特に斎宮Ⅲ期以降は建物群が区画南辺道路から20m付近に集中することが指摘されている。第183次調査は御館地区の実態解明を目的として、平成23年度第172次調査の西側を調査した。また、第184次調査は第183次調査で検出した建物の規模の確認等を目的として、第183次調査区の東西隣接地において実施した。以下、第183・184次の調査結果をまとめて報告する。なお、第183次調査の調査面積は242.4㎡、調査期間は平成26年7月23日～11月14日、第184次調査の調査面積は163.3㎡、調査期間は平成26年12月2日～平成27年2月16日であった。

2 地形と層位

調査区は現況畑地の平坦地である。調査区の南端で標高約11m、北端で標高10.5mであり、緩やかに北側に傾斜している。なお、調査区のすぐ北側で比高差0.5mほどの段差がある。段差の下部では平成26年度に第182-12次調査を行い、遺構が確認されているが、それより北側には低地が広がっている。

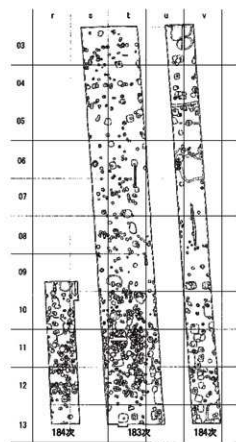
基本層序は、表土(耕作土)、包含層、地山である。調査区南端では表土下約0.15mの標高約11mで地山面が確認でき、耕土直下が地山面で包含層は存在しない。一方、北端では表土下約0.4mの標高約10.2mで地山面を確認した。地山は明黄褐色粘質土で、いわゆる黒ボク層は認められない。遺構は地山上面で検出した。

3 遺構

第183・184次調査では、掘立柱建物11棟、土坑27基、溝5条を確認した。遺構の時期は平安時代初頭から平安時代末に及ぶ。調査区の中でも南半分は多数の柱穴が認められたが、調査面積が限られていたため、認識できた掘立柱建物数は限定的であった。

(1) 斎宮Ⅱ-1期の遺構

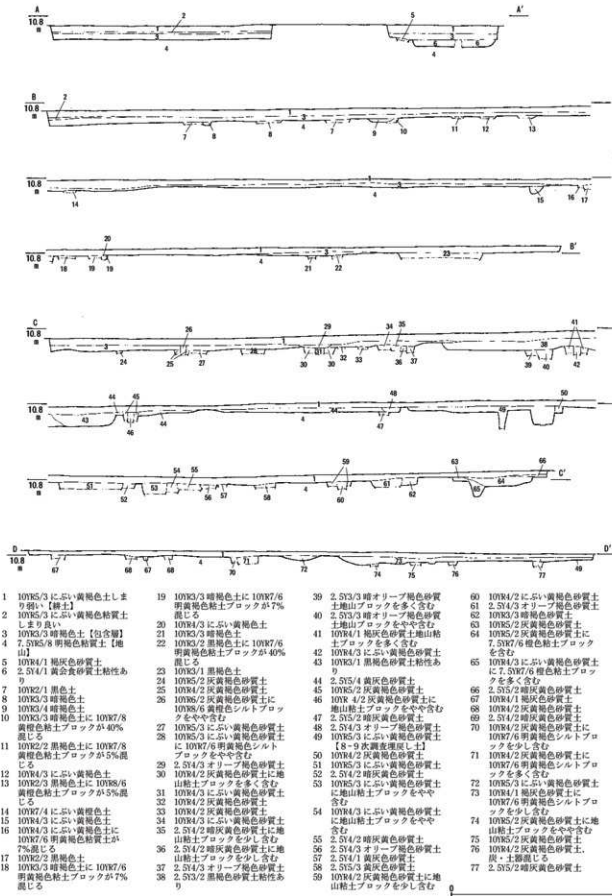
S B 0307 調査区中央で検出した5間×2間の東西棟の掘立柱建物である。昭和49年度第8-9次調査で検出され、第172次調査で建物規模が確定している。柱間寸法は桁行約2.1m、梁間約2.1m。出土遺物から斎宮Ⅱ-1期に属する建物であることが判明している。今次調査では新たに2つの柱穴を確認した。建物の方位は梁間方向で約N4°Wである。



第Ⅱ-1図 第183・184次調査
大地区・グリッド図 (1:400)



第Ⅱ-2図 第183・184次調査 遺構平面図 (1:200)



第Ⅱ-3 図 第183・184次調査 土層断面図 (1:100)

SB10289 調査区北で検出した5間×3間の東西棟で、5間×2間の身舎に南に1間分の庇出がつく庇付建物である。第172次調査で東側の柱列のみを検出していたが、本次調査で建物の規模が明らかとなった。身舎の柱掘形は一辺0.6~0.7mの隅丸方形で直径20~25cm程度の柱痕跡が認められる。庇の柱掘形は一辺0.4~0.5mの略方形で直径18cm程度の柱痕跡が認められる。柱間寸法は桁行方向が2.36m(約8尺)、梁間方向が身舎は2.4m(約8尺)、庇は2.8m(約9.5尺)である。建物の方位は梁間方向で約N6°Wである。斎宮Ⅱ-1期に属する遺構であると考えられる。

SB10299 調査区南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。第172次調査で桁行3間の南北建物として報告されたSB10299が桁行5間×梁間2間の建物規模となることが明らかとなった。柱間寸法は桁行、梁間ともに約2.36m(約8尺)。建物の方位は梁間方向で約N6°Wである。柱掘形は一辺約0.6~0.7mの隅丸方形を呈し、直径約18~約30cmの柱痕跡が認められる。斎宮Ⅱ-1期に属する遺構と考えられる。

SK10799 v13で検出した土坑である。平面形は長径0.9m、短径0.6m以上の略円形を呈する。南側が調査区外へ続く。埋土からは土師器皿が出土した。

(2) 斎宮Ⅱ-3期の遺構

SB10770 調査区北端で検出した東西棟の掘立柱建物である。建物規模は桁行4間×梁間2間、柱間寸法は桁行、梁間ともに、約2.0m。建物の方位は梁間方向で約N6°Wである。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈する。柱穴出土遺物からは斎宮Ⅱ-3期の遺構と考えられる。

SK10791 u3、v3で検出した土坑である。平面形は東西2.1m、南北1.6m以上の略方形を呈する。北側は調査区外へ続く。深さは0.2mを測る。埋土からは土師器皿、土師器甕、須恵器が出土した。

SK10793 u5~v7で検出した土坑である。平面形は南北幅約3mの略方形を呈し、東西両側が調査区外へ続く。深さは0.2mを測る。埋土からは土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。

SK10794 v10で検出した土坑である。平面形は南北1.8m、東西1m以上の方形を呈する。東側が調査

区外へ続く。埋土からは土師器皿、暗文土師器、土師器甕、灰釉陶器が出土した。

(3) 斎宮Ⅱ-4期の遺構

SB10290 調査区北東で検出した東西棟の掘立柱建物である。第172次調査で桁行3間以上の東西建物として報告されたSB10290の西側柱穴が検出され、桁行5間×梁間2間の建物規模が確定した。

(4) 斎宮Ⅱ期の遺構

SB10771 調査区北で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約1.8m、梁間約2m。建物の方位は梁間方向で約N2°Wである。柱掘形は一辺約0.2mの隅丸方形を呈する。調査区西側へ続くと考えられ、建物の規模は桁行4間以上×梁間2間である。斎宮Ⅱ期後半に属する遺構と考えられる。

SB10772 調査区北で検出した南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.3m。建物の方位は桁行方向で約N2°Wである。柱掘形は直径0.2mの略円形を呈する。調査区の西側に続くと考えられ、建物の規模は桁行3間×梁間1間以上と考えられる。斎宮Ⅱ期に属する建物であると考えられる。

(5) 斎宮Ⅲ-1期の遺構

SB10773 調査区北端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.1m、梁間約2m。建物方位は梁間方向で約N5°Wである。柱掘形は直径約0.2mの略円形を呈する。調査区の西側に続くと考えられ、建物の規模は桁行2間以上×梁間2間である。出土遺物からは斎宮Ⅲ-1期の遺構と考えられる。

SK10778 t11~u12で検出した土坑である。平面形は長径3.2m、短径2mの略方形を呈し、深さは0.2mを測る。土師器、須恵器、灰釉陶器、無釉陶器、白磁、ロクロ土師器、土鍾、碁石形石製品、鉄製品が出土した。

(6) 斎宮Ⅲ-2期の遺構

SK10797 v13で検出した土坑である。平面形は南北2m、東西1.6m以上の略方形を呈する。東側が調査区外へ続く。埋土からは土師器、灰釉陶器が出土した。

(7) 斎宮Ⅲ-3期の遺構

SB10774 調査区西南部で検出した掘立柱建物である。昭和49年度第8~9次調査で検出されたもの

遺構名	調査時 遺構名	ピット番号		時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N規準)	備考
		※()はグリッド番号							
S B0307	S B0307	(v10)p8, p10		Ⅱ-1	5(10.5)×2(4.2)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.1	東西	N4°W	
S B10289	S B10289	(t5)p3/(t6)p2/(t7)p1, p5/(u7)p1/ (v7)p1/(u6)p4/(u5)p4/(v5)p4		Ⅱ-1	5(11.8)×3(7.6)	(桁行) 2.36 (梁間) 2.4 (壁) 2.8	東西	N6°W	底付建物 S B10290よりも古 S K10795よりも古
S B10299	S B10299	(t13)p2/(u13)p5/(v13)p1/(v11) p17/(s11)p10/(s12)p4/(s13)p3		Ⅱ-1	5(11.8)×2(4.72)	(桁行) 2.36 (梁間) 2.36	東西	N6°W	
S B10770	建物1	(t3)p6, p8/(t4)p1, p2, p9/(u3)p2/ (s3)p2/(u4)p2/(v4)p1		Ⅱ-3	2(2.0)×4(2.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N6°W	
S B10771	建物4	(s4)p1, p9/(t4)p6, p8/(s5)p1/(t5) p1, p2, p8		Ⅱ期後半	?(-)×2(4.0)	(桁行) 1.8 (梁間) 2.0	東西	N2°W	
S B10290	S B10290	(v5)p3		Ⅱ-4	5(9.0)×2(3.6)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.8	東西	N2°W	S B10289よりも新
S B10772	建物5	(s6)p2, p5/(s7)p3		Ⅱ期	3(6.9)×?(?)	(桁行) 2.3 (梁間) -	南北	N2°W	
S B10773	建物3	(s3)p2, p6/(s4)p2, p3, p10		Ⅲ-1	?(-)×2(4.0)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.0	東西	N5°W	S B10777よりも古
S B10774	建物6	(r10)p14		Ⅲ-3	4(8.0)×2(4.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N3°W	S K10801よりも古 S K10803よりも古
S B10775	建物7	(r11)p16/(s11)p3, p6/(r12)p5, p6/ (s12)p3		Ⅲ-3	?(-)×2(4.2)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.1	東西	N4°W	
S B10776	建物2	(s3)p1, p3/(t3)p2/(s4)p6, p11/(t4) p5, p7		Ⅲ期	2(4.4)×3(6.6)	(桁行) 2.2 (梁間) 2.0	東西	N5°W	S B10773よりも新
S B10777	建物8	(r11)p11/(s11)p7/(r12)p2/(s12) p1		Ⅲ期	?(-)×2(4.4)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.2	東西	N4°W	

第Ⅱ-1表 第183・184次調査 掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
S K10778	183次 土坑1	t11~u12	Ⅱ-1	土師器, 須恵器, 灰軸陶器, 無軸陶器, 磁器, ロクロ土師器, 土師, 基石状石製品, 鉄製品	S B10299より新
S K10779	183次 土坑2	u12	Ⅲ期	土師器, 須恵器, ロクロ土師器	S K10778より新
S K10780	183次 土坑4	t11	Ⅲ-3	土師器, 須恵器, 無軸陶器, ロクロ土師器, 瓦器	
S K10781	183次 土坑5	t10	Ⅲ-3	土師器, ロクロ土師器	
S K10782	183次 土坑7	u12		土師器小片	S K10783より古
S K10783	183次 土坑8	u12		土師器小片	S K10782より新
S K10784	183次 土坑9	u12		土師器小片, 緑釉陶器	
S K10785	183次 土坑10	t11, u11	Ⅲ期	土師器, 須恵器, ロクロ土師器	
S K10786	183次 土坑11	t10	Ⅲ期	土師器, 台付杯, 須恵器, 灰軸陶器,	
S K10787	183次 土坑12	t8		土師器	
S K10788	183次 土坑13	t7, t8	Ⅲ期	土師器, 須恵器	
S D10789	183次 溝1	s11	Ⅲ期	土師器, 須恵器	
S D10790	183次 溝2	t7, t6	不明	遺物なし	
S K10791	184次 土坑1	u3, v3	Ⅲ-3	土師器皿, 土師器甕, 須恵器	
S K10792	184次 土坑2	u3, v3		土師器, 須恵器, 灰軸陶器, 製塩土器	
S K10793	184次 土坑3	u5~v7	Ⅲ-3	土師器, 須恵器, 灰軸陶器	S B10290よりも古
S K10794	184次 土坑4	v10	Ⅲ-3	土師器皿, 土師器甕, 灰軸陶器	
S K10795	184次 土坑5	u6~v7		土師器	S B10289よりも新
S K10796	184次 土坑7	v13		土師器	
S K10797	184次 土坑8	v13	Ⅲ-2	土師器, 灰軸陶器	
S K10798	184次 土坑9	v11, v12		土師器	
S K10799	184次 土坑10	v13	Ⅲ-1	土師器皿	
S K10800	184次 土坑11	r10	Ⅲ期	土師器皿, ロクロ土師器, 灰軸陶器, 白磁碗, 青白磁	S B10774よりも新
S K10801	184次 土坑12	r10	Ⅲ期	土師器, ロクロ土師器, 須恵器	
S K10802	184次 土坑13	r10	Ⅲ期	土師器, ロクロ土師器	S B10774よりも新
S K10803	184次 土坑14	r11		土師器	
S D10804	184次 溝1	v5, u5		土師器	
S D10805	184次 溝2	v7, v8		土師器	
S D10806	184次 溝3	s10		土師器-須恵器	

第Ⅱ-2表 第183・184次調査 遺構一覧表

で、すでに東西桁行4間であることが判明している。今回の調査では南北梁間2間の建物であることが判明した。柱間寸法は桁行約2.0m、梁間約2.0m。建物の方位は梁間方向で約N3°Wである。柱掘形は0.2mの略円形を呈する。出土遺物から斎宮Ⅲ-3期に属する遺構であると考えられる。

SB10775 調査区西南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.0m、梁間約2.1m。建物の方位は梁間方向で約N4°Wである。柱掘形は直径0.2mの略円形を呈する。調査区西側へ続くと考えられ、建物の規模は桁行2間以上×梁間2間であると考えられる。斎宮Ⅲ-3期に属する遺構であると考えられる。

SK10780 t11で検出した土坑である。平面形は長径2m、短径1.7mの略円形を呈する。埋土からは土師器、須恵器、無釉陶器、ロクロ土師器、瓦器が出土した。

SK10781 t10で検出した土坑である。平面形は長径0.5m、短径0.4mの略円形を呈する。埋土からは土師器、ロクロ土師器が出土した。

(8) 斎宮Ⅲ期の遺構

SB10776 調査区北端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.2m、梁間約2.0m。建物方位は梁間方向で約N5°Wである。柱掘形は直径約0.2mの略円形を呈する。調査区内で検出しているのは、桁行2間の範囲だが、東側の第184次調査区でその続きが検出されていないことから、桁行3間の規模におさまると考えられる。出土遺物からは斎宮Ⅲ期に属する建物であると考えられる。

SB10777 調査区西南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行約2.0m、梁間約2.2m。建物の方位は梁間方向で約N4°Wである。柱掘形は直径約0.2mの略円形を呈する。調査区西側へ続くと考えられ、建物の規模は桁行2間以上×梁間2間である。斎宮Ⅲ期に属する建物であると考えられる。

SK10800 r10で検出した土坑である。平面形は長径1.9m、短径1.6m以上の不整形形を呈する。西側が調査区外へ続く。埋土からは土師器Ⅲ、ロクロ土師器、灰釉陶器、白磁碗、青白磁が出土した。

SK10802 r10で検出した土坑である。平面形は長

径1.5m、短径0.6mの略楕円形を呈する。埋土からは土師器、ロクロ土師器が出土した。

4 遺物

遺物は183次調査でコンテナバット41箱、184次調査で19箱出土している。大半は土坑からの出土遺物であるが、ピット出土遺物には良好な一括性を示すものが含まれており、それらについても報告する。

SB10770出土遺物(1~5) (1)は灰釉陶器の底部である。三日月状の高台を持ち、軸はハケヌリと見られる。(2)は灰釉陶器の底部である。細く高い高台が取りつく。(3)~(5)は土錘である。

SB10771出土遺物(6) (6)はいわゆる志摩式製塩土器である。平坦な底部に垂直に胴部が取りつき、内外面ともナデ調整であるが、粘土の接合痕跡を明瞭に残す。底部と体部に煤の付着痕跡を認める。斎宮Ⅱ期に属するものとみられる。

SB10773出土遺物(7~9) (7)は灰釉陶器の底部である。低短な高台がつき、断面は三日月状を呈する。底面に明瞭な糸切痕がみられる。猿投用福年第四期第1小期(O-53)のものか。(8)はロクロ土師器の台付小皿である。わずかに口縁部がななめ上方に持ち上がる。底部は残存しない。(9)は土錘である。遺構は斎宮Ⅲ-1に属するだろう。

SB10774出土遺物(10) (10)は土師器Ⅲである。口縁部をヨコナデし、端部はまるくおさめる。斎宮Ⅲ-3期に属するとみられる。

SB10775出土遺物(11) (11)は土師器小皿である。口縁端部をヨコナデする。斎宮Ⅲ-3期に属する。

SK10799出土遺物(12) (12)土師器ⅢAである。平坦な底部に口縁部が立ち上がり、端部は丸く収める。底部にはケズリが認められる。斎宮Ⅱ-1期の所産。

SK10793出土遺物(13~15) (13)は土師器杯Aである。底部からやや外傾する口縁部が立ち上がり、口縁端部は上方に面を持つ。底部はナデ調整でケズリは認められない。斎宮Ⅱ-3期に属する。

(14)は土師器Ⅲである。丸みをもつ胴部に短く外傾する口縁部が付き、口縁端部はわずかにつまむ。(15)は土錘である。

SK10793出土遺物(16~21) (16)は土師器杯Aである。口縁部はヨコナデにより強く外反し、端部は面を持つ。(17)は土師器杯Aである。体部は丸みを持ち、内湾して口縁端部は上面にむかって面を持つ。外面は口縁端部直下のみヨコナデ、それより下は指頭圧痕の残るナデである。体部内面には放射状の、底部付近にはらせん状の暗文がみとめられる。斎宮Ⅱ-2~Ⅱ-3期に属すると考えられる。

(18)(19)は土師器甕である。(18)は口縁部は短く外傾し、端部はつまみ上げる。(19)は口縁部は水平近くまでひらき、端部には面を持つ。(20)は灰軸陶器の段皿である。シャープな作りでやや黄色がかった軸色を示す。(21)は灰軸陶器碗の底部である。高台は細くシャープに立ち上がる。いずれも斎宮Ⅱ-3期に属するとみてよいだろう。

SK10791出土遺物(22~26) (22)は土師器杯Aである。口縁部はヨコナデにより強く外反するが、口縁端部はまるく収まる。(23)は土師器皿Aである。底部から口縁部が短く立ち上がり、強く外反して口縁端部は上方に面をもつ。内外面ともに、口縁部のみヨコナデ。その他はナデ調整。(24)~(26)は土師器甕である。(24)は胴部は歪な球形で、口縁部は肉厚で外傾し強くヨコナデされる。(25)は丸みをもつ胴部に短く外傾する口縁部が取りつく。口縁端部は面を持ち、上方につまみ上げる。(26)は歪な球形の胴部から口縁部が強く外傾し、やや外反気味に立ち上がり、端部には面を持つ。いずれも、斎宮Ⅱ-3期に属すると考えられる。

SK10778出土遺物(27~31) (27)は土師器皿である。口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は上方に面を持つ。口縁端部外面に煤の付着がみられる。(28)は土師器杯である。体部は内湾し、口縁端部直下をヨコナデする。端部はまるく納める。

(29)は灰軸陶器碗の底部である。高台は幅がせまく高く立ち上がる。(30)土錘である。(31)は基石とみられる石製品である。不整形な円形を呈し、片面は平滑、反対面はやや膨らみを持つ。全体を丁寧に研磨する。石材は凝灰岩と思われる。緑色を呈する。いずれも斎宮Ⅲ-1期頃に属するだろう。

SK10780出土遺物(32・33) (32)は土師器碗である。体部は内湾して立ち上がり口縁端部は丸く

おさめる。体部には指頭圧痕が残りに、口縁部直下のみヨコナデする。内面はナデ調整。(33)は瓦器碗の底部小片である。低短な高台で断面は黒色を呈する。小片のため、調整は判然としない。いずれも斎宮Ⅲ-3期に属するとみておく。

SK10800出土遺物(34~39) (34)は土師器皿である。口縁直下のみヨコナデし、外面に面を持つ。残存状況が悪く、口径は因り小さくなる可能性もある。(35)は灰軸陶器碗の底部である。やや丸みのある胴部に低短な高台がつき、底面には糸切痕が残る。(36)はクロロ土師器の底部である。焼成は軟調で、底部に明瞭な糸切痕が見られる。(37)はクロロ土師器の底部である。低く太い高台を添付する。焼成は軟調である。(38)は台付皿の皿部とみえるが判然としない。器壁の磨滅が著しい。(39)は白磁碗である。体部はやや直線的で、口縁端部は断面三角形で大きく肉厚の縁をもつ。胎土は荒く黒色粒を含み、白色釉が厚く施軸される。太宰府での型式分類で白磁碗IV類該当すると考えられる。時期はややばらつきがあるようにも見受けられるが、概ね斎宮Ⅲ-2~Ⅲ-3期に属するだろう。

SK10781出土遺物(40~42) (40)は土師器杯である。口縁部がやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデし、外側に面をもつ。(41)は土師器碗である。内湾する胴部に、ハの字に開く高台が取りつく。内面、外面ともにナデ調整。内面に重ね焼きの痕跡を認める。

(42)は陶器碗の底部である。底部には輪状の粘土紐を張り付けたごく低短な高台が取りつく。陶器であるが色調は白づく軟調である。全体に斎宮Ⅲ-3期の土器とみておく。

SK10797出土遺物(43) (43)は土師器皿である。平坦な底部からわずかに口縁部が立ち上がり、端部は丸く収める。口縁部のみヨコナデし、それ以外はナデ調整。斎宮Ⅲ-2期頃に属するだろう。

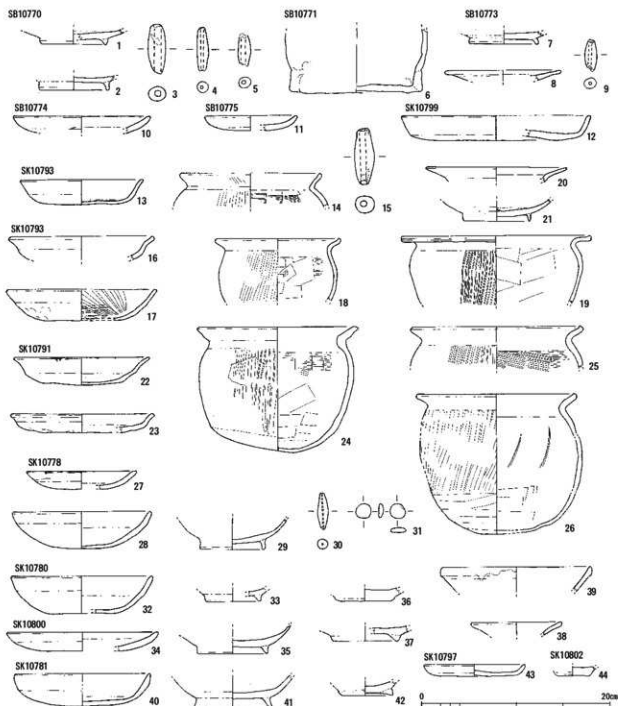
SK10802出土遺物(44) (44)クロロ土師器の底部である。焼成は軟調で、底部に明瞭な糸切痕が見られる。斎宮Ⅲ期の土器である。

ビット出土遺物

t10p3出土遺物(45~48) (45)~(47)は土師器杯である。(45)は口縁端部直下をわずかにヨコナ

デして面をもち、端部も上面に面をもつ。(46)は
 体部は内湾し、口縁端部外面直下をヨコナデする。
 端部はとがり気味にまるく納める。(47)は口縁部
 外面をわずかにヨコナデし、外面に面をもつ。(48)
 は白磁焼である。体部は丸みをもって内湾し、口縁
 端部は小さな玉縁を持つ。口縁端部付近はヨコナ
 デ。器壁は薄い。白磁焼Ⅱ類に相当する。いずれも
 斎宮Ⅲ-3期に属するとみられる。

u11p1 出土遺物 (49・50) (49)(50)は土師器
 杯である。(49)は内湾する口縁部で、口縁部直下
 をヨコナデし、端部に面をもつ。(50)は口縁部が
 外傾し口縁端部直下をヨコナデすることで、外面と
 内面に面を持つ。斎宮Ⅲ-2期に属するとみられる。
 t10p2 出土遺物 (51~63) (51)は土師器杯であ
 る。器壁は底部からやや内湾して口縁部へとつなが
 り、口縁部直下をわずかにヨコナデして端部外面に



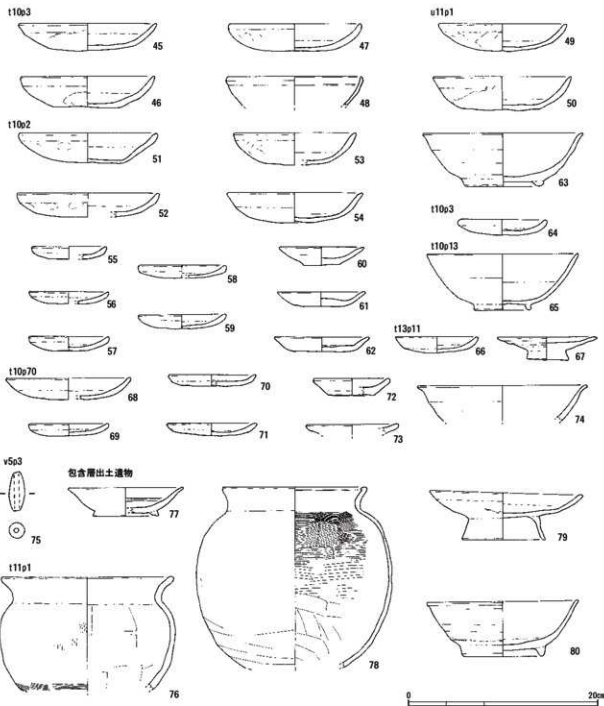
第Ⅱ-4図 第183・184次調査 遺物実測図(1)(1:4)

面をつくる。その下部は指頭圧痕の見られるナデ調整。完形品である。(52)は土師器皿である。器壁は緩やかに内湾し口縁部は端部直下をヨコナデして外面に面を持つ。全体に白っぽい。(53)は土師器杯である。器壁は内湾し、口縁部は端部直下をヨコナデして外面に面をもつ。(54)は土師器杯である。口縁部は外傾して端部をヨコナデする。全体に白っぽい。(55)～(59)は土師器小皿である。(55)は

口縁端部をつまんでヨコナデし、外面に面を持つ。

(56)は口縁端部をわずかにヨコナデし、端部外面に面をもつ。(57)は口縁端部をわずかにヨコナデし、端部外面に面をもつ。(58)は口縁端部をわずかにヨコナデし、端部外面に面をもつ。(59)は口縁部をわずかにつまんでヨコナデし、端部外面に面を持つ。(60)～(62)はロクロ土師器小皿である。

(60)は口縁端部は丸くおさめ、底部には糸切痕が



第二-5図 第183・184次調査 遺物実測図(2)(1:4)

明瞭にみられる。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。(61)は器壁が外傾し、口縁端部は丸くおさめる。内面中央がやや盛り上がり底部には糸切痕が明瞭に残る。(62)は口縁部がやや外反し端部は丸くおさめる。底面には明瞭な糸切痕が見られる。(63)陶器山茶碗である。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。高台は太く低短で、明瞭なモミガラ圧痕が認められる。尾張型第4型式に並行するものとみられ、斎宮Ⅲ-4期にあたると思われる。以上の土器は出土状況から高い一括性が認められる。

t10p3 出土遺物 (64) (64)は土師器小皿である。口縁部外面をわずかにヨコナデし、外面に面をもつ。

t10p13 出土遺物 (65) (65)は瓦器碗である。体部はゆるやかに内湾し、口縁部は直立して端部はややとがり気味に丸くおさめる。器壁の遺存状況が悪く、暗文の状況は判然としない。

t13p1 出土遺物 (66・67) (66)は土師器小皿である。口縁端部をヨコナデし、端部はまるくおさめる。(67)はロクロ土師器の台付皿である。わずかに口縁部がななめ上方に持ち上がる皿部に柱状の脚が

続く。脚部の底面には明瞭な糸切痕が認められる。

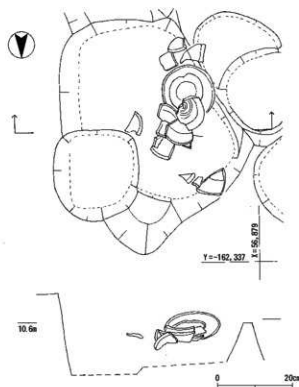
t10p70 出土遺物 (68~74) (68)は土師器皿である。やや内湾する器壁に口縁端部は丸くおさめる。口縁端部直下はヨコナデし、外面に面をもつ。軟調で器壁の残りは悪い。(69)~(71)は土師器の小皿である。(69)は口縁部をヨコナデし、わずかに外面の口縁直下に面を持たせる。(70)は底部からごく短い口縁部を立ち上げ、ヨコナデする。(71)は口縁部を斜めにヨコナデし、端部は丸くおさめる。

(72)(73)はロクロ土師器小皿である。内外面はロクロナデ、底部には糸切痕が残る、口縁端部は丸くおさめる。(74)は陶器山茶碗である。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反して口縁端部は丸くおさめる。シャープなつくりだが、胎土に8mm程度の砂礫を含み、施軸の痕跡は認められない。斎宮Ⅲ-3期以降と考えられる。

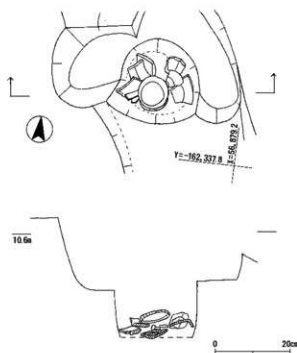
v5p3 出土遺物 (75) (75)は土錘である。

t11p1 出土遺物 (76) (76)は土師器甕である。口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。胴部から口縁部下部への煤の付着が著しい。

包含層出土遺物 (77~80) (77)は緑釉陶器碗で



第Ⅱ-6図 第183・184次調査
t10p2 遺物出土状況 (1:10)



第Ⅱ-7図 第183・184次調査
t10p70 遺物出土状況 (1:10)

番号	種類	器形	地区 遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	登録 番号
1	灰釉陶器	皿	SB10770	底径 径高 6.8 1.6	外面:ロコナダ・ロコクズリ・糸切痕 内面:ロコナダ	密	良	釉:青白磨989 裏地:にぶい・黄裡1036/3	底部 4/12	004-02
2	灰釉陶器	碗	SB10770	底径 径高 7.1 1.5	外面:ロコナダ・糸切痕 内面:ロコナダ	密	良	灰黄2.537/2	底部 6/12	004-01
3	土製品	土埴	SB10770	長さ 幅 5.2 1.8	外面:ナダ	密	良	にぶい・黄裡1036/4	完形	010-08
4	土製品	土埴	SB10770	長さ 幅 4.7 1.2	外面:ナダ	密	良	にぶい・黄裡1037/3	ほぼ完形	010-09
5	土製品	土埴	SB10770	長さ 幅 4.7 1.3	外面:ナダ	密	良	灰黄2.536/2	両端部欠け	011-01
6	製塩土器		SK10771	底径 径高 14.0 6.9	外面:オサエ・ナダ 内面:工具ナダ・ナダ・オサエ	やや 密	良	にぶい・裡7.536/4	底部 2/12	010-04
7	灰釉陶器	碗	SK10773	底径 径高 7.0 1.4	外面:ロコナダ・ロコクズリ・糸切痕 内面:ロコナダ	密	良	灰白2.537/1	底部 1/12	004-04
8	ロコク 土師器	台付 小皿	SK10773	口径 径高 11.9 1.1	外面:ロコナダ・ナダ 内面:ロコナダ・ナダ	密	良	にぶい・黄裡1037/3	口縁部 2/12	004-03
9	土製品	土埴	SK10773	長さ 幅 3.4 1.2	外面:ナダ	密	良	にぶい・黄裡1036/4	両端部欠け	011-03
10	土師器	皿	SB10774	口径 径高 14.3 1.8	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	灰黄2.536/2	口縁部 1/12	004-05
11	土師器	小皿	SB10775	口径 径高 9.4 1.5	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	にぶい・黄裡1037/3	口縁部 1/12	004-06
12	土師器	皿A	SK10799	口径 径高 19.7 2.6	外面:ヨコナダ・ヘラクズリ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	裡536/6	口縁部 1/12	002-06
13	土師器	杯A	SK10793	口径 径高 12.6 2.6	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	裡7.537/6	口縁部 2/12	001-04
14	土師器	壺	SK10793	口径 径高 14.6 3.6	外面:ヨコナダ・ハケメ 内面:ヨコナダ・ハケメ	密	良	裡7.536/6	口縁部 5/12	001-05
15	土製品	土埴	SK10773	長さ 幅 6.0 2.1	外面:ナダ	密	良	にぶい・黄裡1037/3	ほぼ完形	010-07
16	土師器	杯A	SK10794	口径 径高 15.0 2.5	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ	密	良	裡536/6	口縁部 4/12	002-09
17	土師器	碗A	SK10794	口径 径高 15.3 3.3	外面:ロコナダ・オサエ・ナダ 内面:ミダキ(縄文)	密	良	にぶい・黄裡7.536/4	口縁部 1/12	002-02
18	土師器	壺	SK10794	口径 径高 12.8 6.7	外面:ヨコナダ・ハケメ 内面:ヨコナダ・ハケメ	密	良	にぶい・黄裡1037/4	口縁部 2/12	003-01
19	土師器	壺	SK10794	口径 径高 19.7 7.2	外面:ヨコナダ・ハケメ 内面:ヨコナダ・ハケメ	密	良	にぶい・黄裡1037/4	口縁部 1/12未満	002-02
20	灰釉陶器	段皿	SK10794	口径 径高 14.5 1.6	外面:ロコナダ 内面:ロコナダ	密	良	釉:棕色800 新地:灰白2.537/1	口縁部 1/12未満	002-01
21	灰釉陶器	碗	SK10794	底径 径高 2.3 1.9	外面:ロコナダ・糸切痕 内面:ロコナダ	密	良	釉:黒磨815 裏地:灰黄2.536/2	底部 3/12	002-08
22	土師器	杯A	SK10791	口径 径高 14.1 2.9	外面:オサエ・ナダ・ヨコナダ 内面:ナダ・ヨコナダ	密	良	裡7.537/6	ほぼ完形	001-01
23	土師器	皿A	SK10791	口径 径高 14.6 2.0	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	裡7.537/6	口縁部 3/12	001-06
24	土師器	壺	SK10791	口径 径高 16.2 13.4	外面:ヨコナダ・ハケメ・ヘラクズリ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ハケメ・ヘラクズリ・ナダ	密	良	にぶい・黄裡1037/3	口縁部 8/12	001-03
25	土師器	壺	SK10791	口径 径高 17.6 4.6	外面:ヨコナダ・ハケメ 内面:ヨコナダ・ハケメ	密	良	黄黄2.538/3	口縁部 5/12	001-07
26	土師器	壺	SK10791	口径 径高 16.4 14.9	外面:ヨコナダ・ハケメ・ヘラクズリ 内面:ヨコナダ・ハケメ・ナダ	密	良	黄黄裡1038/4	口縁部 11/12	009-02
27	土師器	皿	SK10778	口径 径高 11.4 1.9	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	裡536/6	口縁部 2/12	006-01
28	土師器	杯	SK10778	口径 径高 14.3 3.9	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	黄黄裡1038/4	口縁部 3/12	006-02
29	灰釉陶器	碗	SK10778	底径 径高 6.3 3.3	外面:ロコナダ・糸切痕 内面:ロコナダ	密	良	裏地:灰黄2.537/2	底部 7/12	005-07
30	土製品	土埴	SK10778	長さ 幅 3.8 1.6	外面:ナダ	密	良	黄黄2.537/3	ほぼ完形	010-06
31	石製品	基石	SK10778	直径 厚さ 1.65 0.5				明緑沢7.5078/1	ほぼ完形	010-05
32	土師器	碗	SK10780	口径 径高 14.7 4.0	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ	やや 粗	良	黄黄裡7.508/4	口縁部 1/12	002-04
33	瓦器	碗	SK10780	底径 径高 5.6 1.5	外面:ナダ 内面:ナダ	密	不良	灰S35/1	底部 2/12	002-03
34	土師器	皿	SK10800	口径 径高 15.7 2.0	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	にぶい・黄裡1036/3	口縁部 1/12未満	003-03
35	灰釉陶器	碗	SK10800	底径 径高 7.2 3.0	外面:ロコナダ・糸切痕 内面:ロコナダ	密	良	釉:黒磨893 裏地:灰黄2.536/2	底部 6/12	002-07
36	ロコク 土師器	杯	SK10800	底径 径高 5.2 1.4	外面:ロコナダ・ナダ・糸切痕 内面:ロコナダ	密	良	にぶい・黄裡1037/3	底部 8/12	003-05
37	ロコク 土師器	台付杯	SK10800	底径 径高 6.8 1.9	外面:ロコナダ 内面:ヘラクズリ・糸切痕	密	良	にぶい・黄裡1036/3	底部 2/12	003-04
38	土師器	台付皿	SK10800	口径 径高 9.2 1.4	外面:ヨコナダ 内面:ヨコナダ	密	良	にぶい・黄裡1037/4	口縁部 2/12	003-06
39	白磁	碗	SK10800	口径 径高 15.5 2.7	外面:ロコナダ 内面:ロコナダ	密	良	釉:利休白茶812 裏地:2.537/3	口縁部 1/12	010-02
40	土師器	杯	SK10781	口径 径高 14.1 3.5	外面:ヨコナダ・オサエ・ナダ 内面:ヨコナダ・ナダ	密	良	黄黄裡1038/3	口縁部 6/12	008-04

第Ⅱ-3表 第183・184次調査遺物観察表(1)

番号	器種	器形	地区遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	登録番号
41	土師器	瓶	SK10781	底径 7.9 残高 3.4	外面:ロクロナデ+ナデ 内面:ロクロナデ	密良	灰黄2.5/8/3	底部 7/12	008-06	
42	陶器	瓶	SK10781	底径 5.1 残高 1.5	外面:ロクロナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	にぶい・黄橙10/87/3	底部 11/12	008-05	
43	土師器	皿	SK10798	口径 10.5 器高 1.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	にぶい・黄橙10/86/3	口縁部 1/12	002-05	
44	ロクロ土師器	杯	SK10803	底径 3.3 残高 1.0	外面:ロクロナデ+ナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	浅黄橙10/88/3	底部 8/12	003-07	
45	土師器	杯	110 p3	口径 14.3 器高 3.0	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	にぶい・橙7.5/87/4	口縁部 9/12	005-05	
46	土師器	杯	110 p3	口径 14.0 器高 3.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	橙7.5/87/6	ほぼ完成形	005-04	
47	土師器	杯	110 p3	口径 13.7 器高 2.9	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	橙7.5/87/6	口縁部 5/12	005-03	
48	白磁	碗	110 p3	口径 13.9 残高 3.1	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密良	輪:青白綠989 裏地:灰黄2.5/87/2	口縁部 1/12未満	010-03	
49	土師器	杯	111 p1	口径 13.3 器高 2.9	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	橙7.5/87/6	ほぼ完成形	006-05	
50	土師器	杯	111 p1	口径 14.4 器高 3.6	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+オサエ+ナデ	密良	にぶい・黄橙10/87/4	ほぼ完成形	006-04	
51	土師器	杯	110 p2	口径 14.5 器高 3.0	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	浅黄橙7.5/88/4	ほぼ完成形	006-07	
52	土師器	皿	110 p2	口径 14.9 器高 2.5	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	灰白10/88/2	口縁部 3/12	007-06	
53	土師器	杯	110 p2	口径 12.7 器高 3.4	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	灰黄褐10/86/2	口縁部 3/12	007-07	
54	土師器	杯	110 p2	口径 14.2 器高 3.2	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	灰白10/88/2	口縁部 2/12	007-01	
55	土師器	小皿	110 p2	口径 7.7 器高 1.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	黄灰2.5/87/1	口縁部 2/12	007-12	
56	土師器	小皿	110 p2	口径 8.2 器高 1.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	灰白10/88/1	口縁部 2/12	007-04	
57	土師器	小皿	110 p2	口径 8.3 器高 1.5	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	浅黄橙10/88/3	口縁部 2/12	007-03	
58	土師器	小皿	110 p2	口径 9.0 器高 1.4	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	灰白2.5/87/2	口縁部 4/12	006-09	
59	土師器	小皿	110 p2	口径 9.1 器高 1.6	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	灰白2.5/87/2	口縁部 3/12	007-09	
60	ロクロ土師器	小皿	110 p2	口径 8.8 器高 2.0	外面:ロクロナデ 内面:糸切痕	密良	にぶい・黄橙10/86/4	口縁部 8/12	006-08	
61	ロクロ土師器	小皿	110 p2	口径 9.1 器高 1.6	外面:ロクロナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	淡黄2.5/8/3	口縁部 9/12	007-05	
62	ロクロ土師器	小皿	110 p2	口径 9.8 器高 1.6	外面:ロクロナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	灰白10/88/2	口縁部 4/12	007-02	
63	陶器	山系碗	110 p3	口径 16.7 器高 5.7	外面:ロクロナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	輪:南形系817 裏地:灰黄2.5/87/2	口縁部 2/12	004-09	
64	土師器	小皿	110 p3	口径 8.9 器高 1.7	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	橙7.5/87/6	ほぼ完成形	005-02	
65	瓦器	碗	110 p13	口径 15.8 器高 6.0	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密 不具	灰白7.5/87/1	口縁部 5/12	005-01	
66	土師器	小皿	113 p1	口径 8.3 器高 1.9	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	にぶい・黄橙10/87/4	ほぼ完成形	004-07	
67	ロクロ土師器	台付皿	113 p1	口径 10.1 器高 2.5	外面:ロクロナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	暗灰黄2.5/5/2	口縁部 6/12	004-08	
68	土師器	皿	110 p70	口径 13.0 器高 2.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	黄橙10/88/6	口縁部 2/12	007-13	
69	土師器	小皿	110 p70	口径 8.2 器高 1.4	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	淡黄2.5/8/3	ほぼ完成形	008-03	
70	土師器	小皿	110 p70	口径 8.9 器高 1.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	淡黄2.5/8/3	口縁部 1/12	008-02	
71	土師器	小皿	110 p70	口径 9.1 器高 1.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	淡黄2.5/8/3	ほぼ完成形	007-08	
72	ロクロ土師器	小皿	110 p70	口径 7.7 器高 1.5	外面:ロクロナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	灰黄褐10/86/2	口縁部 3/12	007-11	
73	ロクロ土師器	小皿	110 p70	口径 9.3 残高 1.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密良	橙5/86/6	口縁部 2/12	007-10	
74	陶器	山系碗	110 p70	口径 17.5 残高 3.8	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密良	明焼民5/87/2	口縁部 3/12	008-01	
75	土製品	土埴	v5 F3柱状	長さ 4.1 幅 1.7	外面+ナデ	密良	にぶい・黄橙10/86/3	ほぼ完成形	011-02	
76	土師器	甕	111 p1	口径 17.8 残高 12.0	外面:ヨコナデ+ハケメ 内面:ヨコナデ+ハケメ	密良	にぶい・黄橙10/87/4	口縁部 3/12	005-06	
77	緑釉陶器	瓶	包含層	口径 11.9 器高 3.0	外面:ロクロナデ+ナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	輪:草色834 裏地:にぶい・黄橙10/86/3	口縁部 3/12	010-01	
78	土師器	甕	包含層	口径 15.0 残高 10.9	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ+ハラケズリ 内面:ヨコナデ+ハケメ+ハラケズリ	密良	にぶい・黄橙10/87/2	口縁部 9/12	009-03	
79	土師器	台付杯	包含層	口径 15.9 器高 5.3	外面:ヨコナデ+オサエ+ナデ 内面:ヨコナデ+ナデ	密良	にぶい・黄橙10/87/4	口縁部 4/12	008-09	
80	灰釉陶器	碗	包含層	口径 13.6 器高 5.9	外面:ロクロナデ+ロクロナデ+糸切痕 内面:ロクロナデ	密良	輪:青白綠989 裏地:灰黄10/86/2	ほぼ完成形	009-01	

第Ⅱ-4表 第183・184次調査遺物観察表(2)

ある。口縁部はゆるやかに外反し口縁端部は丸く収める。低短な高台は内面に沈線を持ち、見込み内面には2条の沈線がめぐる。全体にひずみがあり、破面に緑釉が附着していることから、焼成段階で割れがあったことがうかがわれる。近江産と考えられ、時期は斎宮Ⅲ-1期頃と考えられよう。(78)は土師器甕である。球形にちかい胴部から外頸する頸部が立ち上がり、口縁端部は上方に面を持ち、内側に折り曲がっておさまる。(79)は台付坏である。ゆるやかに外側に開く杯部は口縁端部のみヨコナデし、わずかに外反する。高台部は高く立ち上がり、ヨコナデ調整。斎宮Ⅱ-4期～Ⅲ-1期の遺物と見ておく。(80)は灰陶胸器である。器壁はあまり丸みを持たず口縁部は軽く外反し、端部はまるくおさまる。底部はためて短い高台がつき、釉薬はツケガケ。斎宮Ⅲ-1期までにおさまる。

5 まとめ

(1) 本次調査区の建物配置について

今回の調査区で検出した堀立柱建物を概観したとき、以下の3群に大別できよう。

斎宮Ⅱ-1期 (SB0307, SB10289, SB10299)

柱掘形 一辺0.6m～0.7mの隅丸方形
柱間寸法 2.1m～2.4m (7尺～8尺)
建物方位 N4～6°W

斎宮Ⅱ-3～4期 (SB10290, SB10770, SB10771, SB10772)

柱掘形 一辺0.6～0.2mの隅丸方形
もしくは直径約0.2mの略円形
柱間寸法 1.8～2.3m
建物方位 約N2°W～約N6°W

斎宮Ⅲ期 (SB10773, SB10774, SB10775, SB10776, SB10777)

柱掘形 直径約0.2mの略円形
柱間寸法 2.0～2.2m
建物方位 約N3°～5°W

このうち、第1群に属するSB10289, SB10299は建物の東西幅が一致するのに加え、梁間の柱通りがほぼ一致し、柱間寸法、柱掘形のいずれも共通性が高いことから、相互に関連する建物であると考えられる。建物間の距離は、SB10289の南側庇柱列

とSB10299の北側柱列間の距離は19.0m (約64尺)である一方、双方の南側柱列間の距離は26.7m (約90尺)である。また、さらに、SB10299の南側柱列は、御館区画南辺区画道路北側溝から北へ14.8m (約50尺)に位置し、西側柱列は想定されている西辺区画道路東側溝から東へ35.6m (約120尺)に位置している。このことから、SB10289, SB10299は方格地割を基準に配置が計画された建物である可能性が高いと考えられよう。ただし、SB10289, SB10299の主軸方向はN6°Wで、方格地割の方向であるN4°Wから2度ずれており、注意を要する。また、斎宮Ⅱ期後半になると掘立柱建物の柱間寸法が完好な尺寸から外れ始めるとともに、柱掘形が隅丸方形から略円形に、また直径も0.6m前後から0.2mに変化する。こうした変化はこれまでも発掘調査時に注意されてきたことであるが、改めて確認できたと言えよう。

(2) 御館区画における建物の消長

御館区画の南半分については、発掘調査によって様相が判明してきている。平安時代前期においては、本調査区の位置する西側においては方格地割を基準とした建物が配置されていた可能性がある一方で、東側においては同様の建物配置は認められず、同一区画内においても西側と東側で異なる建物配置がとられていた可能性がある。一方、平安時代後期においては御館区画内でも南側の南辺道路に近い部分に掘立柱建物が集中している様子が看取できる。同様の傾向は御館区画の東側に隣接する柳原区画においても認められる。さらに、本調査区においては、包含層出土遺物も含め、もともと時期が下る遺物は斎宮Ⅲ-4期に属するものであった。すなわち、御館区画においては、12世紀までは土地の利用が継続していく可能性が高いと考えられる。

斎宮の方格地割内部においては、斎宮Ⅲ-1期以降、牛葉東区画内に内院の機能を残しながら、徐々に方格地割の外部へ機能を移転ないし分散させていったという指摘がある。御館区画で実施した本調査の結果はこれまでのこうした方格地割の消長と一致するものであり、方格地割内部の土地利用について、再確認できたものと評価できよう。

写真図版 1



第183次調査全景（南から）



第184次調査東トレンチ全景（北から）



第184次調査西トレンチ全景（北から）



SB10299 (南から)



SB10289 (西から)

写真図版 3



SB10770、SB10773、SB10776 (西から)



SB10770、SB10773、SB10776 (北から)



t10p2 遺物出土状況（北から）



t10p70 遺物出土状況（北から）

写真図版5



t10p2出土遺物



t10p70出土遺物



6



12



65



77

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせいにじゅうろくねんどはつくつちょうさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 平成26年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	伊藤文彦							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-7027							
発行年月日	西暦 2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
さいくうあと 斎宮跡	たきぐさ 多気郡明和町 さいくう 斎宮・竹川	24442	210	34° 31' 55" ～ 34° 32' 30"	136° 36' 16" ～ 136° 37' 37"	20140723 ～ 20150206	242.4㎡ (第183次) 163.3㎡ (第184次)	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
斎宮跡 第183・184次	官衙	平安		掘立柱建物 溝 土坑		土師器 須恵器 灰釉陶器 山茶碗 ロクロ土師器 白磁 志摩式製塩土器 土鍾		平安時代の初頭から末にかけての掘立柱建物群を確認
要約	平安時代斎宮の方格地割でいう「御館区画」の南西部の発掘調査である。平安時代前期から後期にかけての建物11棟のほか、土坑や溝を確認した。調査区内においては、平安時代前期には御館区画全域を利用して建物を配置する状況見られたのに対し、平安時代後期になると、建物群は御館区画南辺道路に近接する調査区南側に集中する状況が見られた。また、本調査区では12世紀を下る遺物は認められず、御館地区の土地利用は平安時代末を下限とする可能性が高いことが明らかになった。							

史 跡 齋 宮 跡

平成26年度

發 掘 調 査 概 報

2016年3月25日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印 刷 光出版印刷株式会社
